九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

書評: Lydia H. Liu, Translingual Practice : Literature, National Culture, and Translated Modernity : China, 1900-1937

黄, 克武
(台湾)中央研究院近代史研究所 : 研究員 : 中国近代思想史, 文化史

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院 : 助教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/6473

出版情報：言語科学. 38, pp.141-152, 2003-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：Translated with the permission of the auther, Max K. W. Huang (黄克武).

(翻訳)書評:Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity —China, 1900-1937*

黄　克　武　著
中里見　敬　訳

Review: Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity —China, 1900-1937*

Max K. W. Huang
Translated by Satoshi Nakazatomi

言　語　科　学

第　38　号

九州大学大学院言語文化研究院言語研究会

2003

書評：Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity — China, 1900-1937* (Stanford, Stanford University Press, 1995)

黄克武 著，　中里見敬 訳

【解題】

本訳稿は、黄克武評《劉禾著〈跨越語際的實踐：一九００至一九三七年間中國的文學、民族國家文化與被翻譯的現代性〉》（《中國現代史書評選輯》25，臺北：國史館, 2000）を翻訳したものである。

評者の黄克武(Max K. W. Huang)氏は、国立台湾師範大学、オックスフォード大学でそれぞれ修士号を取得したのち、2001年には博士論文 "In Search of Wealth, Power, and Freedom: Yan Fu and the Origins of Modern Chinese Liberalism" によりスタンフォード大学歴史学科から博士学位を授与されている。現在、台湾の中央研究院近代史研究所・副研究員の任にある気鋭の学者である。

黄克武氏の主要著書としては、《一個被放棄的選擇：梁啟超調適思想之研究》（中央研究院近代史研究所專刊 70，臺北：中央研究院近代史研究所, 1994)、および本文の注 15 にも掲出されている《自由的所以然：嚴復對約翰彌爾自由思想的認識與批判》（臺北：允晨文化實業股份有限公司，1998；上海：上海书店出版社，2000）がある。また編著として、黄克武・張哲嘉主編《公與私：近代中國個體與群體之重建》（臺北：中央研究院近代史研究所，2000）があるほか、《戒嚴時期臺北地區政治案件口述歷史》（中央研究院近代史研究所口述歷史叢書 72，臺北：中央研究院近代史研究所, 1999）の聞き取り調査にも参加している。さらに、近刊の Joshua Fogel, ed., *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China* (Berkeley: University of California Press, Forthcoming) には論文 "Liang Qichao and Immanuel Kant"を寄稿している。

本書評には、黄克武氏の中国近代思想史家としての本領だけでなく、批評理論や文学・文化研究に対する深い理解と関心も示されている。そのため本書評は周到なレビュー論文であるだけでなく、多様な領域にまたがる原著の意義を解説した絶好の紹介ともなっている。また本書評は、近代中国のみならず、日本・韓国・台湾など東アジアにおける国民国家・国民意識の成立に関心をもつ読者に対して、原著の成果を紹介し、有意義な啓発を含む内容となっている。ややもすれば日本研究・中国研究・韓国研究が分断されたまま視野を閉ざしがちな日本の学界の現状に照らして、本書評が東アジアというパースペクティブで当該の問題群を考えるきっかけになることを期待したい。

なお、原著および原著者については、以下の日本語訳を参照いただきたい。

リディア・リュウ著、宮川康子訳「言語横断的実践・序説(上)(下)」(『思想』899, 900，東京：岩波書店，1999-5, 6)

リディア・リウ著、中里見敬訳「ホモ・エコノミクスと小説的リアリズムの問題」(『言語文化論究』13，福岡：九州大学大学院言語文化研究院，2001)

リディア・リウ著、中里見敬訳「『中国新文学大系』の成立」(『言語科学』36，福岡：九州大学大学院言語文化研究院言語研究会，2001)

リディア・リウ著、中里見敬・清水賢一郎訳「文化と国粋を再考する」(『言語文化論究』14，福岡：九州大学大学院言語文化研究院，2001)

原著の中国語訳は従来の部分訳とは異なる、附録も含めた全訳版が最近刊行された。
刘禾著，宋伟杰等译《跨语际实践：文学，民族文化与被译介的现代性（中国，1900-1937）》（北京：生活・读书・新知三联书店，2002）

原著に対する英語による書評には以下のものがある。掲載誌および評者名を記す。

China Information, vol. XI, no. 1 (Summer 1996), pp. 139-145. Rev. by Michel Hockx.

The Journal of Asian Studies, vol. 55 (Nov. 1996), pp. 989-990. Rev. by Wendy Larson.

Comparative Literature, vol. 49 (Summer 1997), pp. 283-285. Rev. by Wang Ban.

Philosophy East & West, vol. 48, no. 3 (July 1998), pp. 524-529. Rev. by Viren Murthy.

Harvard Journal of Asiatic Studies, vol. 58, no. 2 (Dec. 1998), pp. 568-580. Rev. by Theodore Huters.

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, vol. 61, part 1 (1998), pp. 182-183. Rev. by Daruvala S. F.

（以上、中里見記）

近代中国の重要な特色の一つは、東西文化の接触にともなって一連の変化がもたらされたことであり、その過程の複雑な様相がどのようにして出現したかという問題は、一貫して中国近代史研究の重要な課題であった。アメリカの学者ポール・コーエンは、西洋の中国近代史に関する研究モデルの変遷——西洋の衝撃論、伝統と近代性、帝国主義論から、中国自身に即したアプローチが現れるまで——を描写して、歴史学者は「中国の歴史を西洋から説き起こすのではなく、中国みずからのうちに始まるものと捉え、中国の歴史においてなにが重要かを決定するのに、可能なかぎり、外在的（西洋の）基準ではなく、内在的（中国の）基準を用い」るべきだと強調している*1。またコーエン以前に、西洋の学界ではサイードのような人たちが、すでにオリエンタリズム(Orientalism)に対する反省を開始していた。西洋人が東洋を論じるとき、西洋の近代性を主要な参照軸として、研究対象を異なる他者(other)に、しかも後れた時間的・文化的枠組みの中に放逐し、そうすることによって近代西洋の文化的主体を称揚することから免れえなかった、と考えるのである*2。コーエンとサイードの両者はともに西洋を中心とした研究姿勢を批判し、東洋の主体性を主張する。しかし、そうした批判的観点のもとで、中国と西洋の文化がいかに「互いに融合しあい解釈しあう」のか、またいかにして新たな文化を生み出していくのかといった課題は、彼らの反省の中でいまだ十全な解決をみていない。

本書の著者リディア・リウ（劉禾）はアメリカのハーバード大学の博士で、現在カリフォルニア大学バークリー校比較文学学科で教鞭をとっている【訳者補：2001 年よりミシガン大学アジア言語文化学科兼比較文学プログラム教授】。主な研究分野は中国近代

文学史・文化史であり、本書は彼女の博士論文を修正し、拡充したものである*3。著者はコーエンのいわゆる「中国自身に即したアプローチ」の研究方法に賛同し、中国近代文学の研究もこうした観点を採用すべきだと考える。一方、時間の前後関係に密着して「影響」の研究を行う従来の比較文学の立場には賛成せず、「主言語」(the host language, 本書では中国語を指す）が意味形成過程ではたす積極的な役割を探求すべきことを主張する。そのように考えると、「客言語」(the guest language）は必ずしも本質的な真実性や真正（オーセンティシティ）さを備えたものではなく、またそのまま異なる時間的・空間的コンテクストに移しかえられるものとは限らなくなる。むしろ、主言語と客言語は、複雑に変動する歴史過程の中で互いに入り交じりあうものなのである。「中国自身に即したアプローチ」を採用することによって歴史的問題の重要性（あるいは非重要性）に境界線を引くことは、必ずしも同時に「西洋中心」的な考慮を放棄することになるとは限らないと著者は考える。二十世紀の中国と西洋の文化接触を議論するとき、我々は一方で「西洋」、「近代化」、「進歩」といった啓蒙時代以来の観念を放棄することができず、他方ではまた中国本土を一つの固有なものと見る考え方(a reified idea of indigenous China)から自由になれないというところに問題のカギはある（pp. 27-29)。この点についていえば、著者の研究方法は、コーエンのいう西洋の衝撃論、伝統と近代化、帝国主義論を乗り越えており、また中国自身に即したアプローチという新しい趨勢をも凌駕している。しかも見逃してならないのは、著者の研究方法は中国自身に即したアプローチという概念によって示されたやり方よりもはるかに精緻であることだ*4。

それでは、サイードの「オリエンタリズム」はどのような欠点を持っているのだろうか。著者は、その見方は深い洞察力を有しているけれども、限界もあると考える*5。著者は宣教師アーサー・スミス(Arthur H. Smith)の中国人の国民性に関する著作(*Chinese Characteristics*, 1894)を例に、スミスの描いた中国人の国民性が、中国人という全体的な形象を「創出＝捏造」(invent)し、西洋世界に中国を認識する（あるいは歪曲する）素材を提供した、と説明する。しかし、魯迅が日本語訳（『支那人気質』）を通してこの本に触れ、またこの本が様々な方式で『東方雑誌』のような雑誌に抄訳掲載されることによって、中国人が「国民性」の問題を議論するようになると、スミスのテクストがもつ意味はたんに一人の宣教師が西洋の眼差しで東洋を誤解した(the Orientalist gaze of the West)ということにとどまらず、歴史の発展を作り出す「真に歴史的な出来事」(genuine historical events)となったのである(pp. 58-60)*6。

リウのこの著作は、西洋の学界におけるここ二、三十年来の歴史・社会理論をめぐる反省に呼応して、以下のいくつかの重要な思潮に沿って問題意識を形成し、さらにそれを中国の歴史研究に応用することを意図している。まず第一に、著者がことばを重視するのは、ハイデッガー『言葉への途上』(*Unterwegs zur Sprache*, 1959, 英訳は *On*

the Way to Language)に示されたことばと実存の関係と切り離せないものである*7。言い換えると、ことばはもはやある主体の意図を反映する伝達の道具と見なされるのではなくて、意味を構築することのできる積極的な性格を有し、また存在の実体となるのである。このようにして、著者は文学作品それ自体(work itself)を存在の自立性を有したものとは見なさず、したがって我々はテクストの内容を研究するだけではその含意を明らかにしえず、人々がテクストを認識する過程に注意を向けねばならなくなる。こうした切り込み方は明らかに解釈学(hermeneutics)の影響を受けている*8。第二に、著者が植民国家と非植民国家の接触過程において生まれた文化の混淆性(hybridity)を探究するのは、ポストコロニアル理論(post-colonial theory)に基づいている。上述のサイードはこの理論の支持者である。第三に、著者が主体と客体を区別することを反省し、また具体的な「実践」過程を強調するのは、ピエール・ブルデュー(Pierre Bourdieu)らの観点と無縁ではない。こうした理論の内容についてここで立ち入って論じることはできないが、本書の内容に対する以下の具体的な紹介をとおして、読者には理論的研究と実際の歴史研究の間の密接な関係を理解していただくことができるかと思う。

以上のような様々な理論によって啓発された思考の方向性に基づいて、著者は近代における中国と西洋の文化接触に関する従来の研究を乗り越えようとする。本書の主旨は、「翻訳」と言語の問題に密着しながら、歴史的かつ動態的な研究方法によって、1900 年から 1937 年までの中国と西洋の接触のもとで、様々な実践をとおして、いかにして「翻訳された近代性」が構築されたかを探ろうとするものである。東洋と西洋の両者を二項対立と見なす硬直した考え方を打ち破るために、著者は文化生産における「共同創作権」(coauthorship, p. 46)を考える。もちろん、我々は同時により根本的な問題——すなわち異なる言語間の「翻訳」ははたして主観的な流用や創出(インヴェント)=捏造から免れうるのか——を思索するよう促される(p. 263)*9。

著者のいう翻訳とは、実はたんなる言語の変換だけではなく、翻訳という概念が指示する含意により広く目を配ろうとするものである。著者が書名の中で示しているように、「翻訳された近代性」という概念を用いて、近代中国の国民文化(national culture)、とりわけ近代の中国文学がどのように形成され、またどのようにして正統性(legitimation)を獲得したのかを研究しようとする。簡潔にいえば、著者のねらいは、「ことばという言説」を経由して、中国の「近代」がどのようにして形づくられたかを考えることにある。

著者が「中国の近代性」という問題に本書の問題意識を焦点化しているのには、特別な意図がある。二十世紀における中国と西洋の出会いののち、大量に生まれた新しい語彙と知は、どれも中国の近代性という問題を考えるのに格好の材料だと著者は考える。近代性の問題を考え、近代化を肯定するためには、近代的な「国民国家理論」

を作りあげることが根本的に重要であった。著者のいう近代国民国家(modern national state)とは、中世以降の西洋で出現した近代的な国家形態であり、中国ではこうした国家形態は辛亥革命後、伝統的な「天朝モデル」(殷海光の用語)を打破して作られた政治形態である。しかし、その形態が出現する以前、およびその制度の初歩的輪郭が作られて以後、中国の知識人は「国民国家理論」を提起して、そのプロセスを推進しようと努めた。それによって、近代中国における中国語エクリチュールと、中国人による近代国家の構築と想像との間に、「自然な」(naturalized)つながりが作りあげられたのである。

こうした「近代国民国家主義」の中心的イデオロギーは、たんに中国人が帝国主義に抵抗する際の理論的根拠となっただけではなく、権力に関する新たな言説実践を創造し、二十世紀における知の生産のあらゆるレベルに浸透していったのである。著者は、上述した魯迅らによって提唱された「国民性改造」の例をあげて、「文学創作が国家建設の前線へと押しだされ、……国家国民主義が文学の領域を占領したことを表している」と説明するだけでなく、さらに近代文学およびそれと関連する「すべての文学実践」へと視野を広げて、次のようにいう。

> 五四以来、「近代文学」と呼ばれているものは、実は国民国家文学の一種である。そうした文学が生まれるには、複雑な歴史的原因があった。主として、近代文学の発展と中国が近代国民国家に入っていく過程とがちょうど重なったために、両者の間には密接な相互関係があるのだ。……従来の近代文学研究は作家、テクスト、あるいは思想内容を過度に強調しすぎていた。しかし、国民国家という言説空間においては、「近代文学」という概念は作家やテクスト以外のすべての文学実践——とりわけ近代における文学批評・文学理論および文学史の構築と活用——を視野に入れる必要がある。こうした実践が、直接または間接に、テクストの生産・受容・監督・歴史的評価をコントロールし、支配者たちの鑑賞活動を支配したり方向づけることによって、近代文学を国民国家の意志に服従させるのである。その意味で、近代文学は国民国家の産物であると同時に、一方では、国民国家のために主導的イデオロギーを作り出す重要な基地でもあるのだ。*10

しかし、こうした実践過程において、国民国家言説の支配力がそれと関係のない言説を選択的に抑圧したり、排除したりするのは自然のなりゆきであった。

リウの理論は高尚で難解に聞こえるかもしれないけれども、その内容はきわめて着実な研究に基礎を置いている。なかでも特に紹介しておく価値があるのは、第一章の議論、および附録(pp. 259-378)に収集されている十九世紀以来の中国語・日本語とヨーロッパの言語および文化の相互交流によって生まれた「近代中国語の外来語」であ

る。これらの部分における探求は、上述したおおむねハイデッガー以来の西洋の学界における「言語論的転回」(linguistic turn)と不可分の関係にある*11。著者は附録を七つの部分に分けて、近代中国語の外来語の由来をさかのぼり、中・日・ヨーロッパ語の三者の対照関係を注記している。それと同時に著者は、新語には固定した単一の起源があるのではなくて、創出(インヴェント)=捏造と流通によって共同で形成された「意味の変容する語源学」の産物であることにも、読者の注意を喚起している(p. 35)。その七つの部分とは、以下のとおりである。第一類は、宣教師によって作られた中国語の用語(「空気」、「民主」、「汽車」、「文学」など)。第二類は、近代日本語によって翻訳されたヨーロッパの観念を採用したもの(「抽象」、「目的」、「動物園」など)。第三類は、近代日本語の中の漢字語で、ヨーロッパの言語とは関係のないもの(「場所」、「集団」、「宗教」など)。第四類は、日本人が中国の古典語彙を用いてヨーロッパの観念を翻訳し、それが文化交流を経て中国に還流してきたもの(「自由」、「司法」、「師範」、「国民」、「文化」など)。第五類は、近代日本語における接頭語や接尾語(反革命の「反」、創造性の「性」、工業化の「化」など)を採用して作られた新語。第六類は、漢音によって英・仏・独語を音訳して生まれた新語(「酒吧」は bar の、「夾克」は jacket の音訳であるような例)。第七類は、漢音によってロシア語を翻訳して作られた新語(「沙文主義」(ショービニズム)、「拖拉機」(トラクター)、「伏特加」(ウォッカ)、「蘇維埃」(ソビエト)など)。

著者はこうした語の由来を明らかにすることによって、熟知しているようで実はよく知らなかったことばの世界へと読者を導く。その世界はまた、文化交流と言語横断的実践という著者の中心的課題と密着しており、また新語の輸入と創造によって、中国の言語がいかに変化したか、とりわけ現代の白話文【訳者補:中国語の言文一致文体。1917 年の胡適らによって始まった文学革命・白話文運動以降、それまでの文言文(文語体、いわゆる漢文)に代わる書きことばの文体として定着した】はいかに作りあげられたかを明瞭に示しているのである。もちろん読者は、「言語が思想を構築する」とか「言語は存在の実体である」といったたぐいの、やや新奇な考え方に必ずしも同意する必要はない。しかし、もし我々が思想は相当程度に言語表現によって制限されるということを受け入れるならば、中国近代思想の基礎はこうした新しい語の上に築かれているということができるだろう。本書における著者の重要な貢献の一つは、この附録を利用することによって、近代中国の重要な新語の由来を非常に便利なかたちで調べることを可能にした点にある。評者が物足りなく思うのは、近代翻訳の大家である厳復(1854-1921)がこの過程で果たした役割が十分に強調されておらず、なかでも厳復訳の特殊な貢献、および厳復訳の一部分が日本語訳に取って代わられた過程とそのことの意味について注意が払われていないことである*12。このことは、著者には自らの収集した豊富な史料をさらに存分に利用して、いっそう精緻な分析を展開する余地の

あることを示していよう。

しかし、翻訳および語彙の借用それ自体は、新たな文学あるいは国民国家文化の出現を必然的にもたらすわけではない。なかでもどの作品を翻訳するのか、またなぜその作品を翻訳しなければならないのかといった問題がかかわってくる。著者は次のようにいう。

> 広く定義すれば、言語横断的実践の研究とは、客言語との接触／衝突によって、あるいは客言語との接触／衝突にもかかわらず、主言語の中で、新たな語・意味・言説・表象のモードが生まれ、流通し、正統性（レジティメーション）を獲得する過程を探ることである。したがって、ある概念が客言語から主言語へと伝わる過程で、意味(meanings)が「変換」されたというよりは、むしろ主言語のローカルな環境の中で、意味が創出（インヴェント）＝捏造されたというべきである。(p. 26)

リウが採用する「言語横断的実践」という研究方法は、文化横断的研究にとって特別な意味をもつ。著者は従来の二つの異なる観点に挑戦している。一つは普遍主義的な観点である。この見方によれば、翻訳という仕事はある概念をありのままにA語からB語へと変換できる。したがって、翻訳の実践は二か国語辞書のように、異なる文化に由来することばを直接的な対応関係で結ぶ。もう一つは相対主義的な観点で、ことばには翻訳不可能性があると考える。著者はこの二つとは違う道を歩もうと試みている。こうした方法論は、中国研究に対して、またインド・イスラム世界・ラテンアメリカ諸国など、第三世界の文化研究に対して、啓示的な意義を有するものである。

著者が本書で設定した場は、中国・日本と西洋である。そして、三者に由来する文化的要素が翻訳という場で対面(confrontation)したとき、その過程で起こった偶然の出来事や相互の競争、また驚くべき歪曲が、いかに歴史のゆくえに影響を与えたかという点に、著者の関心の焦点はある(p. 32)。こうした対面の場において、中国の知識人は大きな創造力を発揮した。彼らは西洋の語彙を借用し模倣しただけでなく、自らの目的のためにより積極的に批判・歪曲・流用し、また西洋の文学と言説を再創造して、新たな文化を作り出したのである。ここで触れられているのはもはや事実上、言語実践の政治学(politics)である(p. 8)。

本書の序論では、理論に関する問題が論じられている。続く三部に分けられた八つの章では、それぞれ異なる諸側面が取り上げられ、言語転換の実践をとおして、「翻訳された近代性」を基盤とした近代中国の国民国家文化がいかにして構築されたかが追究される。第一部「国民と個人のはざまで」において、著者は魯迅の国民性改造問題を検討し、この問題をめぐる議論は、誰が観察し、誰が観察され、そして誰が表象(represented)されているのかといった要素によって形成されていると論じる。ついで

五四以後、個人主義が中国に伝えられた問題を検討する。第二部では「表象の言語横断的モード」(translingual modes of representation)が取り扱われる。この三章では、老舎・郁達夫・沈従文・丁玲らの作品によって、これらの作者がどのようにして西洋の修辞法や創作のスタイルと形式を取り入れたかを論じる。著者は影響という単純な概念では、中国文学に表れた近代性の複雑な様相を把握するには十分でないと考え、「生産的歪曲」(productive distortion)という新しい視点を提起する。こうして、多くのテクストが「隠された言説的問題」を内包することになる。例えば、施蟄存(1903年生まれ。戴望舒とともに雑誌『現代』を創刊した)はフロイトの精神分析理論を用いて、シュールリアリズム小説の創作に従事しただけでなく、古典小説における「志怪」の伝統を現代に生まれ変わらせることにも関わっているのだ(pp. 136-137)。第三部「国民創出と文化建設」では、著者は国民国家の中心的言説を検討するだけでなく、女性作家には女性自身の関心があったことをも論じている。文学大系の編纂によって作りあげられた創作規範、および誰が中国文学を正統に定義しうるのかをめぐる議論を経て、著者の最後の問題が導き出される。すなわち、中国の知識人にとってどうして「文化」が、国民国家および中国人の特殊性を表す指標となったのか、彼らはいかにしてこのような考え方を身につけたのかという問題である。以下、第三、七、八章の内容をやや詳しく紹介しよう。

第三章における「個人主義」言説に対する分析は、著者の意図を余すところなく示している。著者が論じるテーマは、中国で「国民国家」概念が構築される過程において、西洋の個人主義という言説がどのように推称され、また排斥されたかという問題だ。著者はまず、五四運動に対する多くの研究者の理解が本質主義的(essentialism)であること、東洋/西洋、個人/国家を対立的にとらえる傾向があることを批判する*13。著者は歴史の過程に立ち戻ることを主張し、外来概念の移植がいかに現地語話者の選択により決定され、しかもその選択の基準がいかに現地の政治権力作用の基盤である伝統的言説構造に依拠しているかを考察する。

当時、中国固有の語彙の中に「自我」、「我」、「己」など個人に関わることばがあったにもかかわらず、「個人主義」という新語が明治日本から借用されたことを著者は指摘する。現在の中国の学術界における個人主義問題に関する論争は、この概念と中国固有の情況との間に相容れないものがあることをはっきりと示している。しかし、著者は個人主義を本質的な意味で把握しようするのではなく、民国初期の議論の中でこの語彙が経てきた過程にさかのぼって、個人主義言説が形成される語源学を提示しようとするのである。

第七章は「正統的言説としての文学批評」である。著者は国民国家主義の文学批評に対する浸透力を示すために、「中国近代文学の批評実践と国民国家文学との関係」を議論する。著者は蕭紅の『生死場』と近代文学の批評機制、および権威ある大家に

よる文学史執筆の関係をとおして、国民国家文学の生産過程を検討する。『生死場』は蕭紅の出世作であり、この小説は九・一八事変【訳者補：満洲事変、柳条湖事件】前後の東北農村の生活を描いており、その中の女性の運命が小説の一つの重点であることを指摘する。この小説の発表後、その解釈と評価はたえず国民国家言説の支配を受けてきた。しかし、著者によれば、そうした「男性的」、「国民国家主義的」な読解（魯迅や胡風の評論のような）には重大な盲点がある。なぜなら蕭紅にとって、生と死の意味はまず何よりも個人の身体に、とりわけ女性の身体の上に体現されるのであって、たんに民族の興亡だけに関わるものではないからだ。女性の身体は生と死の場であるだけでなく、この小説が内実と意味を獲得する根源でもあることを著者は強調する。しかし、従来の男性文学批評家たちは、蕭紅の国民国家言説に対する複雑な感情を無視し、さらに彼女が中心的言説を転覆したことを抹殺して、まったく別の物語を語ろうとしてきたのである。こうした現象は、蕭紅と国民国家主義および家父長的伝統の間の矛盾を示しており、また近代文学批評が国民国家文学の生産に関与する歴史的プロセスをも示している(pp. 199-213)*14。

第八章において著者は、上海の良友図書公司の若き編集者・趙家璧が一九三〇年代にどのようにして十巻の『中国新文学大系』を作りあげ、出版したかを論じている。一九三二年、趙家璧は『良友画報』の出版で有名だった良友公司に入社し、編集の仕事に携わる。一九三四年、趙家璧は『中国新文学大系』の構想を会社に提案する。この企画は、日本語出版物の中の類似の著作からヒントを得たもので、「大系」の二字も日本語の漢字から直接採用されたものだった。良友の社長・伍聯徳がこの企画にゴーサインを出してから、一九三六年二月の『中国新文学大系』完結に至るまで、編纂、印刷から刊行までのすべてにかかった時間はわずか二年足らずであった(p. 227)。

本章における著者の考察は、いくつかの根本的な問題を含んでいる。該書の編纂と当時の政治情勢の関係はどうであったか（国民政府による左翼文人の弾圧、新生活運動の発動など)。編纂の過程で、編集者は「文学」とは何かについてどのように構想したのか。時代区分はどのように行われたのか。どのような基準によって分類し、文章の選択を行ったのか。さらにこうした分類は国外の分類とどのような関係があるのか。もちろんこうして作り出された文学大系は、編集者の基準に合わない作者・ジャンル・作品を排除することになる。大変興味深いことには、『中国新文学大系』の出版後、趙家璧は蔡元培の激励のもと、一セット十冊からなる『世界短篇小説大系』の編纂を企画し、各国の文学およびその中国の作家に対する影響を反映したものにする予定であった。ところが、残念なことに日本の上海占領によって中止となった(p. 237)。近代文学大系出版の物語に関する描写と分析は、著者の歴史および文学批評の両面における才能を示している。こうした角度から描き出すことによって、テクストの外部にある文学史編纂の置かれた文化的コンテクスト——政治・社会・経済的背

景、人間関係、思想的要素などを含む——が総動員されて、生き生きとしたダイナミックな歴史的イメージが構築されている。このような精緻な手法は、これまでの研究者に見られないものである。

管見のおよぶ限り、中国研究において、翻訳という観点から近代中国の国民文化の形成を論じた著作はきわめて少ない*15。本書は理論的探究の深さと資料運用の広さの両面で、いずれも従来の研究を凌駕するものである。また本書は比較文学だけでなく、文化史および理論の再考とも密接な関係を有している。著者が行っているのは、文学批評・テクスト分析・言語学・言語哲学・歴史研究などを含む、領域横断的な学際研究であることがわかるだろう。こうした研究は、東西の言語文学・歴史・文化に対する深い理解がなければ、到底なしえないものである。

リウ氏の大著は、読者に近代中国の文学と文化に対する新たな思索を促すとともに、本書で示された重要な問題——文化横断的な比較研究・中国の近代性・東西文化の接触・比較文学など——に対する研究をいっそう進展させるよう、研究者を鼓舞しているのである。

注

*1 Paul A. Cohen, *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past* (New York: Columbia University Press, 1984), p. 186.【日本語訳：ポール A.コーエン著，佐藤慎一訳『知の帝国主義：オリエンタリズムと中国像』（東京：平凡社，1988）p. 266。引用は佐藤訳によるが、一部、訳者（中里見）が改変した箇所がある。】【中国語訳：柯保安著，李榮泰等譯《美國的中國近代史研究：回顧與前瞻》（臺北：聯經出版, 1991）。】

*2 特に、Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979).【日本語訳：エドワード・W. サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』（東京：平凡社，1986；平凡社ライブラリー, 1993; 1995）。】【中国語訳：爱德华・W・萨义德著，王宇根译《东方学》（北京：生活・读书・新知三联书店, 1999）。】 余英時は次の二点を強調する。サイードのいう「東洋」は主に中東のイスラム教世界を指し、中国を含んでいない。またアラブ世界の各民族は自己の文化的アイデンティティを作りあげ、それによって西洋帝国主義の文化的覇権に抵抗しているとサイードは主張するけれども、彼は狭い部族的観点は採らず、また「他者」の文化はすべて排斥すべきだとも考えない。余英時《歴史人物與文化危機》（臺北：東大圖書公司，1995）pp. 12-13。サイードの経歴と思想についての簡潔な紹介は、薩依德著，單德興譯《知識分子論》（臺北：麥田出版社，1997）の訳者による緒論を参照。【日本語訳：エドワード・W. サイード著、大橋洋一訳『知識人とは何か』（東京：平凡社，1995；平凡社ライブラリー，1998）。日本語訳の訳者あとがきにもサイードの簡潔な紹介がある。】

*3 著者の博士論文は、"The Politics of First-Person Narrative in Modern Chinese Fiction," Harvard

University, 1990 である。

*4　コーエンの「中国自身に即したアプローチ」に対する反省と批判に関しては以下も参照。Arif Dirlik, "Reversals, Ironies, Hegemonies: Notes on the Contemporary Historiography of Modern China," *Modern China*, 22: 3 (1996), pp. 243-284.

*5　著者はサイードの「オリエンタリズム」論の啓発を深く受けると同時に、サイードの成果を乗り越えようと企てている。1992 年 4 月末、本書の著者とサンフランシスコ州立大学歴史学科の Tani E. Barlow 教授【訳者補：1994 年よりワシントン大学歴史学科兼女性学科教授】は、「『オリエンタリズム』以後：グローバルな文化批評の中での東アジア」という学会を共同で開催し、オリエンタリズムを反省するとともに、歴史レベルからの欧米覇権による東アジア植民地化研究を開拓した。学会は 1993 年春に東アジア文化批評の理論的雑誌 *Positions: East Asia Culture Critiques* を発刊し、毎年 3 号刊行することを決定した。当誌はすでに東アジア文化批評の重要な雑誌となっている。この学会に関する報道は、鄒羽《理論與歴史：柏克萊"'東方主義'之後全球文化批評中的東亞"研討會述評》(《今天》1992: 3, 香港：社會理論出版社, pp. 241-249) 参照。Tani E. Barlow は *Positions* 誌上の重要な論文をまとめて、「植民地の近代性」をテーマとした、*Formations of Colonial Modernity in East Asia* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1997) という本を刊行した。同書にはリウの論文も収録されている。

*6　著者は James Hevia の観点に同意して、宣教師のエクリチュールは歴史事実を受動的に反映しているというよりは、むしろ歴史事実を作り出すことを企図した、あるいは実際に歴史事実を作り出し、後世の人々の歴史事実に対する認識を作り上げたというべきだと考える (p. 58)。James Hevia, "Leaving a Brand in China: Missionary Discourse in the Wake of the Boxer Movement," *Modern China*, 18: 3 (1992), pp. 304-332 参照。ほかにオリエンタリズムと中国研究に関しては、Arif Dirlik, "Chinese History and the Question of Orientalism," *History and Theory*, 35: 4 (1996), pp. 96-118 も参照。

*7　この本の中国語訳は、孫周興譯《走向語言之途》(臺北：時報文化出版公司, 1993)。余德慧《詮釋現象心理學》(臺北：會形文化事業有限公司, 1998) における、ハイデッガー理論の紹介も参照。【日本語訳：ハイデッガー著、亀山健吉、ヘルムート・グロス訳『言葉への途上』(ハイデッガー全集 第 12 巻, 東京：創文社, 1996)。】

*8　Richard E. Palmer, *Hermeneutics* (Evanston: Northwestern University Press, 1969).

*9　これは言語学者 Willard Van Orman Quine (1908-) が繰り返し問題にしているものである。例えば、英語の frog は中国語の「青蛙」に翻訳可能だろうか。表面的に見ると、frog と「青蛙」はどちらも、四本足で緑色をした飛び跳ねることのできる小動物に対応する。しかし、英語の frog という単語の背後にある文化的意味あいは、「青蛙」という単語が中国語世界においてもつ文化的意味あいとは異なっている。こうして悲観的な人は、異なる言語間における意味の変換は、最終的には不可能だと考えるのである。

*10　劉禾《文本、批評與民族國家文學：〈生死場〉的啟示》(唐小兵編《再解讀：大眾文藝與意識型態》香港：牛津大學出版社, 1993) p. 31。【訳者補：傍点は評者(黄)による。】

*11　言語論的転回、およびそれが思想史、社会、文化の研究に与えた衝撃に関しては、多く

の議論がある。例えば、John E. Toews, "Intellectual History after the Linguistic Turn: The Autonomy of Meaning and the Irreducibility of Experience," *American Historical Review*, 92: 4 (1987), pp. 879-907. Richard M. Rorty, *The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method* (Chicago: University of Chicago Press, 1992). Victoria E. Bonnell and Lynn Hunt, eds., *Beyond the Cultural Turn: New Direction in the Study of Society and Culture* (Berkeley: University of California Press, 1999).

*12 著者は本書25, 35, 87頁の三か所で厳復に言及しているが、触れるだけで深い分析は見られない。熊月之には厳復訳の新語の歴史的運命を論じたものがある。彼によれば、厳復が苦心して練り上げた新語は、「物競」(生存競争)、「天択」(自然淘汰)、「邏輯」(ロジック) などが後世も使われている以外は、「計学」(統計学)、「群学」(社会学)、「内籀」(帰納)、「版克」(銀行) など、ほとんどが日本から転訳された新名詞に淘汰された。また彼は、商務印書館が厳訳八種の後に付け加えた「中西訳名表」は482項を収めているが、そのうち今も学界で使われているのはわずか56項にすぎないことを指摘している (その中には厳復がそれ以前の翻訳、「歌白尼」(コペルニクス)、「美利堅」(アメリカ) などを踏襲しているものも含む)。熊月之《西学东渐与晚清社会》(上海: 上海人民出版社, 1994) pp. 701-702。

*13 この点に関しては、著者は明らかにサイードの観点——反本質主義(anti-essentialist)論、文化純粋論への反対、東西二分法の不当性への批判、アイデンティティは構築されたものである——に賛同している。

*14 孟悦・戴錦华《浮出历史地表: 現代妇女文学研究》(郑州: 河南人民出版社, 1989; 臺北: 時報文化出版公司, 1993) も女性と国民主体との矛盾した関係を深く分析している。

*15 拙著はこうしたテーマに関わる別の一例である。黄克武《自由的所以然: 嚴復對約翰彌爾自由思想的認識與批判》(臺北: 允晨文化實業股份有限公司, 1998; 上海: 上海书店出版社, 2000)。この本において、私はテクスト対照の方法によって、厳復がどのようにしてジョン・スチュアート・ミルの *On Liberty* (『自由論』) を『群己権界論』へと翻訳したかを分析した。彼の翻訳は実は再創造の過程であり、しかも中国の将来に関する彼の思索と密接な関係がある。

Translated with the permission of the author, Max K. W. Huang(黄克武).